

製作 50 周年記念『2001 年宇宙の旅』70mm 版

『2001 年宇宙の旅』 2001: A Space Odyssey (164 分*休憩 15 分含む・70mm・カラー)

1968(MGM)(製)(監)(脚)(特殊撮影効果)スタンリー・キューブリック(脚)アーサー・C・クラーク
(撮)ジェフリー・アンズワース(美)トニー・マスターズ、ハリー・ラング、アーネスト・アーチャー(特殊効果)ウォーリー・ヴィーヴァース、ダグラス・ランブル、コン・ペダーソン、トム・ハワード
(出)キア・デュリア:デイヴィッド・ボーマン、ゲイリー・ロックウッド:フランク・プール、ウィリアム・シルベスター:ヘイウッド・R・フロイド博士、(声)ダグラス・レイン:HAL

音楽:ジェルジ・リゲティ「アトモスフェール」「ソプラノ、メゾ・ソプラノ、2つの混声合唱と管弦楽のためのレクイエム」「ルクス・エテルナ」「アヴァンチュール」、リヒャルト・シュトラウス「ツァラトゥストラはかく語りき」、ヨハン・シュトラウス「美しく青きドナウ」、アラン・ハチャトゥリアン「ガイーヌのアダージョ」
(日本語字幕:木原たけし)

製作 50 周年記念『2001 年宇宙の旅』70mm プリントについて

“製作 50 周年記念『2001 年宇宙の旅』70mm”とは、1968 年の『2001 年宇宙の旅』公開後に初めて、ワーナー・ブラザーズ(WB)が、カメラネガから作成した新しいプリント素材を基にフォトケミカル工程のみで作った 70mm ニュープリントのこと。“unrestored(アンレストア)”版と称されたこの 70mm プリントは、クリストファー・ノーラン監督の協力を得て、1968 年当時のオリジナルの画と音の再現を目的に作製された。本プリントは、第 71 回カンヌ国際映画祭でプレミア上映の後、5 月 18 日のアメリカ公開を皮切りに、イギリス、フランス、オーストラリア、ドイツ、イタリア、カナダ、アイルランド、ノルウェー、オーストリア、スコットランド、デンマークと欧米各地で順次上映されており、当企画「ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」記念特別イベント 製作 50 周年記念『2001 年宇宙の旅』70mm 版特別上映」(主催:国立映画アーカイブ、ワーナー ブラザーズ ジャパン合同会社)での日本上映後も、海外の次の上映会場が待っている。

この“アンレストア”版 70mm プリントの作製は、1999 年に遡る。同年に WB が、カメラネガの保護を目的としてインターポジの作製を行った。ネガは、現像で修正可能な程度の褪色がみられ、若干の収縮から、内側に少し丸くなるカーリングも生じていたという。この時キューブリックのタイミングノート等に基づいて作製されたインターポジを、2017 年秋にノーランが見て、70 mm プリントを作成してロードショーを行うことを WB に提案。ノーランらの監修により、複雑なカラータイミングを重ね、アンレストア版 70mm プリントの誕生となった。ネガにあった裂け目や傷も本来の姿としてそのまま残された。音は、オリジナルの 35 ミリ磁気サウンドトラックが再生不能なため、1980 年代に作られた 35 ミリの保存用素材をソースとし、デジタルフィルタリングや修正をせずにオリジナルのサウンドデザイン—スクリーン裏の 5ch(L/LC/C/RC/R)とモノラルサウンドの計 6ch—を再現。再生方式は DATASAT デジタルサウンド。

映写は、上映指示書(WB版)にもとづいて行います。

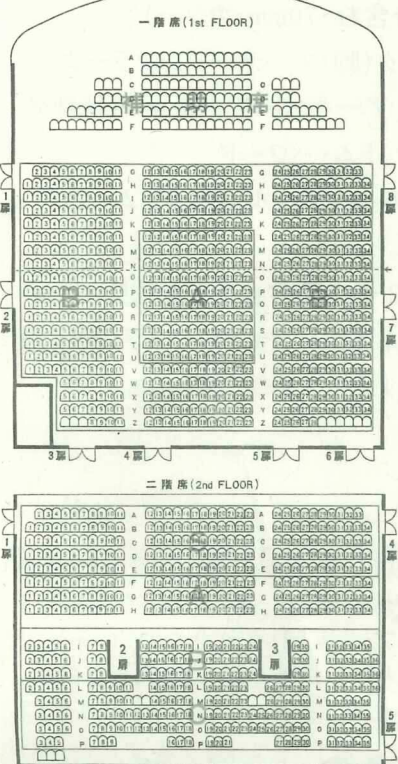
上映時間は 164 分(休憩 15 分含む)。
前奏曲:2 分 53 秒(カーテンは閉じたまま、照明はほの暗く。映画が始まる前に、照明 OFF、カーテンを開ける)。
休憩字幕:26 秒。休憩は 15 分。
幕間音楽:2 分 18 秒(カーテンは閉じたまま、照明はほの暗く。映画が始まる前に、照明 OFF、カーテンを開ける)。
追出し音楽:4 分 23 秒(「The End」が消える 10 秒前に、照明をあげて、カーテンを閉める)。

*大きな映画、“アンレストア”版 70mm プリント、シネラマについては、『NFAJ ニュースレター』3 号(税込 310 円)をご参照ください。

休憩時等に上映ホールから出られる時は、必ず半券をお持ち下さい。再入場される時、半券のご提示が必要です。

1968年公開当時のシネラマ劇場：テアトル東京

テアトル東京		S	A	B	C	合計
1階	168	120	535			663
2階	168	192	80	347		497
小計	168	322	613	147		1,150



「床から天井までの巨大なスクリーン 東京で唯一のスーパーシネラマシアター(大阪はOS劇場)」を謳ったテアトル東京(銀座一丁目)では、4月10日の有料試写会後、4月11日から9月19日まで特別興行をおこなった。

同館は、『西部開拓史』(1962年、MGM=シネラマ、ジョン・フォード&ヘンリー・ハサウェイ&ジョージ・マーシャル)の上映の為に改装してシネラマ劇場となった当時、スクリーンの高さ10m×横23m、湾曲の深さ5mと報道されている。

シネラマ劇場のスクリーンは、人間の視界にほぼ近い146度の湾曲スクリーンが特徴の一つであり、テアトル東京のスクリーンは、左の図のように(テアトル東京「団体鑑賞ご案内『2001年宇宙の旅』」チラシより)補助席の2列目までを包み込む配置になっている。この湾曲スクリーンの効果を前提に、テアトル東京では、S席:1200円、A席:1000円、B席:700円、C席:500円の料金設定(いずれも土日祝日の料金)で、全席指定・入替制で上映された。補助席は満席の場合のみ売り出されたという。

『2001年宇宙の旅』は、この湾曲スクリーンへの投映効果を前提に考えられた構図が多数とられている。シネラマ劇場の湾曲スクリーンへの投映効果を想像しながら、公開当時の画と音の再現を追求した“アンレストア”版70mmプリントの上映を体験されたい。

日本語字幕がよく見えない場合に 『2001年宇宙の旅』 主要会話の略筋

“アンレストア”版70mmプリント特有の画と色艶をご鑑賞いただけるよう、日本語字幕の投影はスクリーンの下に行います。字幕がよく見えない場合は、以下の会話略筋をご参照ください。

- 宇宙ステーション:フロイドは、月のクラビウス基地で起こっている奇怪な出来事—電話回線の故障、緊急着陸の拒否、伝染病が発生したという噂—の話を聞く。
- 月の基地での会議:フロイドは、科学史上最も重要となるかもしれない発見の秘密保持の為に、伝染病の話の流れに言及。秘密保持は、世界が大混乱に陥ることを避ける為で、フロイドは、事実や意見を収集してニュース公表の時期や方法について提言書を作成する任務を説明。
- 調査にむかう宇宙船:発見されたものは、磁力を持つ岩でも建造物でもない。意図的に埋められたものと説明される。
- ディスカバリー1号:木星へ向かって旅立った科学者たち。木星への初めての有人宇宙飛行として受けたインタビューが放送される。クルーは5名と最新型のHAL9000コンピュータ。3名は食糧と空気を長持ちさせるため人工冬眠状態。HALは船の頭脳・中枢神経と紹介される。
- ・或る時、HALはボーマンに、探査計画に疑問を抱いている事を打ち明ける。ボーマンに「クルーの精神状況報告か」と言われた後、HALはAE-35ユニットが72時間以内に故障することを報告。
 - ・ボーマンは管制センターと、船外作業でAE-35を交換するプランを話す。
 - ・ボーマンは管制センターから、HAL9000が故障予測を誤った可能性を告げられる。
 - ・HALは、予測の誤りを問われ、9000は完全無欠で、ミスを犯すのは人間、と応える。
 - ・ボーマンとプールは、HALの異常を疑い、異常の場合はHALの接続回路を切ることを決める。
- ＝以下は、ボーマンに明かされる秘密任務の説明。鑑賞前に知りたくない方は、後でお読み下さい＝
- ・HALの回路が切れた途端、フロイドがビデオに登場し、HALだけに知らせていた極秘命令を説明。18か月前地球外にも知的生命が存在する証拠が発見された。月面下に埋められていた木星に向けて強力な電波を発していた石碑のような物。正体と目的は不明、とのこと。